

〔報道〕

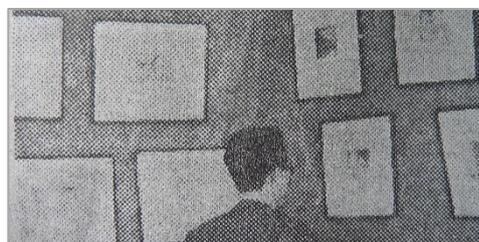
「今日 (五月一日) から八日まで

春陽展 名古屋新聞大画廊」

(36)

春陽展の前奏

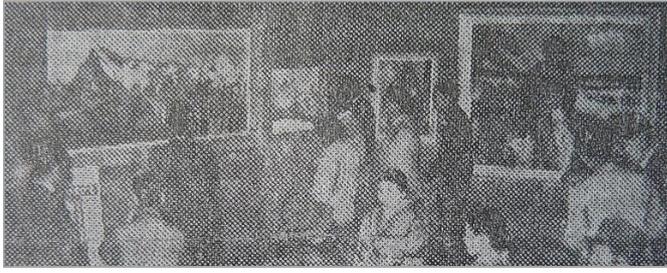
待望の本社主催「第十六回春陽展」は愈々一日から八日まで本社南館画廊で蓋開けされるが、卅日早朝東京から、春陽会会員水谷清画伯が来名し、在名会友大澤鉦一郎氏ほか春陽会系画家参集、陳列に着手した。油絵作品二百余点に、石井鶴三、木村莊八両会員の挿絵作品その他小品合わせて三百余点の大公開であり、なほ一日は会員中川一政画伯も来名し氣勢をあげるはず。【写真は陳列準備中の同会場】 (五月一日付)



異彩を放つ小品室

さし絵原画公開にも興味津々

第十六回春陽展は本春美術界の代表的收穫作品三百余点を本社南館大画廊にあつめて展陳。けふ一日から八日まで大豪華絵巻として中央日本鑑賞界にまみゆることになった。東京につき大阪に先んじて開くだけに、名古屋における最高絵画展であることは勿論、初日が日曜日でもあり鑑賞群がドツと押寄せるであらうことを予想されるが、会員会友の名作の他、本年から小品約六十点が特設の別室に公開。これは希望者に傾つ企てでもある。これには石井鶴三、木村莊八、中川一政各画伯の興味深い作品がならべられ、東京府美術館でも頗る好評だっただけに、名古屋でも格別愛好家の注目とならう。特筆すべきは石井、木村両画伯の挿絵公開であつて、神品とされる「墨東綺譚」「宮本武蔵」「去る日 来る日」などのさし絵原画が並べられるのであり、この一室の鑑賞だけでも、入場者は十二分の満足を得ることであらう。【写真は興味深き小品さし絵室の一角】 (五月一日付)



美術の花 パツと咲く
きのふ蓋あけ 絶讃の春陽会展

待望の春陽会第十六回展は一日朝九時、本社南館画廊で蓋あけされた。絶好の新緑日和であり、日曜とあつて場内は終日一杯の鑑賞群で賑はつた。三十日夜尾崎士郎氏と来名した会員中川一政画伯も場内に顔をみせ氣勢をあげ会員水谷清画伯、なほ大澤鉦一郎、加賀孝一郎、宮脇晴各画伯など春陽会系在名画家は勢揃ひの上それぞれ説明案内役をつとめてゐたが、特設即売室も頗る好評で第一日すでに盛んに買上げられた。開会時間は朝九時から夕五時までである。

【写真は賑やかな鑑賞者たち。会場にて】

(五月二日付)

話の交通壕
水谷清画伯



一日からひらく本社主催の「春陽会展」準備のため三十日来名、九日まで滞在。

◇：ぼくが今度春陽会展へ出した《緑衣の婦人》は、あれは例のシムラ会商に際し、民間代表だつた奥村さんに紹介されて、モデルになつて貰つて描いたものだが、ゴワリヤといふ国の首相の娘で、インドの若い役人の奥さんなんだよ。インド漫遊中一番美しく感じた婦人で、アリヤン系統のとても整つた顔。

◇：しかもそれが銅色にかがやいて反対色の緑衣との調和がたまらなかつたんだ。一体インド婦人が、モデルになるなんて珍らしいことで、あの作品はちよつとそんな意味でも思ひ出の深いものがあるんだ。

(五月二日付)